

## 85. 狭窄症対応の顛末

長年の腰痛持ちだった。

それが1年前に、傷んだ床を修理しようと前屈姿勢で大工さんの真似事をしてから、痛みがひどくなってきた。実際には長年の姿勢の悪さや、いつも同じ姿勢で長時間机に向かっていたのが影響していて、大工仕事は表面に現れるきっかけでしかなかったのだろう。

仕方なく街の A 整形外科医院に行ったが、簡単な問診とレントゲンを撮り、電気マッサージなどを行う治療だった。一寸納得できるものではなかった。数回通院してから、これではならじと MRI の撮れる病院に行きたい旨を伝え、紹介状を書いてもらい公立の B 病院に移った。

そこで撮った脊柱管の画像を見せられて将に衝撃を受けた。神経が沢山通る脊柱管は見事に腰部で極端に細く括れていた。これでは痺れがひどい筈だと思った。痺れは尻から下にかけてであった。脊柱管狭窄症だ。わかっていたが思わず医師に「この括れは治療すれば元に戻りますか」と聞いてしまった。「いや〜、戻らないんですよ」と当然の回答。

この脊柱管狭窄症、自転車は前屈みになるので問題なく乗れる。散歩は調子の良い時は幾らでも歩けるし、いつも行く飯能の低山ハイキング位なら問題なかった。だが、調子の悪い時は歩きはじめて直に痺れが酷くなり、杖に寄り掛かり休止せざるを得ないこともあった。

B 病院では血流を良くする薬を処方してもらい、飲み始めると2週間位で痛みも痺れも明らかに改善されてきた。1ヶ月後再診すると、薬の効果を理由に「元の医院に戻しますから」と言われてしまった。少々不満だったが、そういう仕組みなのかと思い、MRI データが入った CD と手紙（紹介状？）を持たされて、元の A 医院に行くことになってしまった。出戻りだ。

A 医院で CD を提出すると、パソコンにデータを取込み、「CD は患者さんが保管して下さい」と返されてしまった。医院では血流の薬を貰うだけになってしまった。

それが、2ヶ月もすると、薬が効かなくなったのか痺れが元のように酷くなってきた。その頻度が徐々に多くなるようだった。再度意を決し、二度目の紹介状を先の B 病院宛に書いてもらう羽目になってしまった。出戻りの出戻りだ。

B 病院では、「薬物療法の次の段階の処置はブロック療法（注射）だが、恐らく効果はなく手術しかない」と言われてしまい、手術を覚悟するしかなかった。

実は、長男が同じ脊柱管狭窄症で、且つ同じ B 病院で一足はやく手術が必要と言われ、体の負担の軽い手術が可能な C 病院で手術を受けていた。そのこともあり私も C 病院で手術を受けることにした。B 病院から再度 MRI の CD と紹介状を貰い C 病院に行くことになった。CD はパソコンに取込むと返却され、同じ MRI データの CD を結果的に2枚持つことになった。

C 病院では、治る可能性は低いが一応ブロック注射ということになったが、やはり効果はなく手術となった。入院診療計画書の病名欄には「腰椎椎間板ヘルニア」、手術内容欄には「椎間板ヘルニア切除術」とあるが、「内視鏡下椎間板摘出術（MED）」という手術方法だ。この MED は、体に入る超小型カメラと医師が目視する大型スクリーンモニターの両方が高画質で見られ体内の様子やヘルニアの状態が高画質で見られるという。椎間板ヘルニアの取り出しは全身麻酔で皮膚に2cm程度の切開をし内視鏡を挿入、手術時間は60分前後で、出血はほとんどなく、筋肉の剥離も少なく体への負担が小さいという。

私の場合は6泊7日の入院であった。手術後の一晩は傷口からのチューブ、点滴針、心電図のセンサー、等々で体は半ば固定され寝返りもできず苦しかった。少しでも動く看護士さんから叱責され、少し言い合いになってしまったが、その後は順調に推移し、その親切さに頭が下がる思いとなり看護士さんとも仲良くなれた。何より手術を境に痺れが一切なくなり、医師や看護士さんには感謝しかない。昨年5月にA医院に行ってからC病院退院までの約11ヶ月、色々と遠回りしたが、結果よければ全て良しの顛末記だ。

退院後少し微熱が続いたがそれも収まりつつあり、散歩も開始した。59回目の多峯主山（飯能）行きも5月になれば可能だろう。  
(2024年4月15日)